

巻 頭 言

アイセンターへの道

聖隷浜松病院 アイセンター長

尾 花 明

2024年2月に開催された日本眼科手術学会において、筆者は総会長企画「アイセンターへの道」というセッションをコーディネートした。そこで眼科医療の現在と未来について話し合う機会を得たので、自分の原稿に関連づけるのも恐縮ではあるが、本号掲載のアイセンター紹介に関連して、眼科医として40年余り体験してきたことと、今後の在り方について若干の考えを述べたい。

最近、全国の病院でアイセンターと称する施設が急増している。アイセンターと眼科は何が違うのか？という疑問を持つ方も多いと思うが、それに応える形で、洛和会音羽アイセンターの栗山晶治センター長がこのセッションを発案され、尾花と昴会アイセンター 米田一仁先生が座長を勤め、岡山成人病センター 岡野内俊雄先生、愛知医科大学 瓶井資弘教授を含めた4名が、自施設の状況を紹介した上でアイセンターとは何か？を討論した。4施設は設立母体が異なり、当院は社会福祉法人、昴会は公設民営病院、岡山は民間病院、愛知医大は私立大学が名古屋の街中に開いた外来診療に特化したクリニック（MiRAI）で、それぞれ設立経緯は異なるが、高度な医療を効率的に提供するという共通理念以外に、本音の部分では経営的な問題から生き残りをかけた戦略であることが伺えた。「生き残り」という言葉は、「アイセンター紹介」中にも使用したが、なぜ、そんな言葉が必要になるのかを理解して頂くために、まず、ここ40年の眼科の流れを概説する。

小生が眼科医になった1983年、白内障手術は上手な先生で1時間、普通は90分程度かかり、眼内レンズはないので術後は分厚い凸レンズ眼鏡をか

ける時代だった。しかし、90年代に白内障手術の技術革新、超音波装置が普及し、パラダイムシフトが起こった。手術時間は10分足らずで、眼内レンズは患者を分厚い眼鏡から解放した。手技に長けた医師は独立し、全国に〇〇眼科病院という入院設備を備えた大きな個人病院、いわゆる白内障御殿が林立した。ところが皮肉なことに装置の進歩で手術は日帰りになり、入院設備の維持負担が重くのしかかるため〇〇眼科病院のトレンドは消滅した。次に起こったのは硝子体手術のパラダイムシフトである。トロッカーシステムと広角観察装置の進歩で、かつては一部の眼科医のみが名人芸のように行っていた手術も、若手医師が普通に行えるようになり、浜松市内でも多くの医師が硝子体手術を手掛けている。白内障同様、装置と手技の進歩は多くの症例で日帰り手術を可能にし、1時間以上かかった手術は30分足らずになった。そこで生まれた形態が、外来手術に特化した個人クリニックである。固定スタッフによる洗練されたシステムで多数例を効率的にこなすことができ、高収益は最新装置購入と高給による若手医師を呼びこみ、フランチャイズ展開の好循環を生んでいる。このように技術革新によって病院・医院のトレンドは大きく変化した。一方、病院内の一診療科としての眼科を考えると、パラメディカルは入れ替わりが多く常に不慣れなメンバーで、業務は非効率、機器更新もままならず、給与は固定、定年後は終わった人、と負の側面が大きい。当然、若手医師からの人気は下がり常勤医不在になる。この悪夢からの「生き残り」策の一つがアイセンター化である。

因みにChatGPTに「アイセンターといわゆる眼科は何が違うのか？」を問うたところ、提供できるサービスの種類が異なるとの回答で、アイセンターの使命は一般的な診療以外に、視能訓練、予防医学、地域住民への情報発信と啓蒙だそうで、要するに診断・治療の枠を超えた豊富なサービス提供が求められるとのことであった。「病院経営からみたアイセンターのメリットはなんですか？」と問うと、専門化と差別化による競争優位性の獲得、ブランディング効果による需要喚起、設備と人員配置の最適化による効率的運営というもっともな回答を得た。一見、常識的な回答に過ぎないが、競争優位性の獲得などの的を射た部分もある。外来手術に特化した施設の弱点を考えると、対応症例に限界があること、すなわち全身疾患を持つ患者や複雑な身体的・社会的背景をもつ患者に対応できないことである。この点は非常に重要で、超高齢化により複数の疾患を持つ患者が急増しており、例えば白内障でも健康な白内障患者は減り、認知機能低下や全身疾患、複雑な家庭環境を持つ患者が増えている。このような患者への対

応には眼科以外の診療科、麻酔医、専門看護師、ケースワーカーさらに入院設備が必要で、ここにアイセンターの役割がある。そこで、当センターには専門分野の異なる医師を多く集め、いかなる症例にも一定の対応ができるようにしたい。「聖隷浜松病院アイセンターに行けば何とかしてもらえ」と市民に信頼される存在でありたい。そのためには医療者にも魅力ある施設を作り、志の高い医師に集まってもらわねばならない。

近年、かつて経験したことのないような高齢者の炎症性疾患、感染症、変性疾患が増えており、診断さえ困難な症例がある。このような症例には複数の診療科医師の協力が必要であり、その点からも総合病院のアイセンターは有用である。一口にアイセンターと言っても様々な形態があるが、レベルの高い総合病院の中にあって、様々なニーズにも応えることのできる当センターはこれからの時代に求められる形態と考える。患者、医療者、病院経営者の3者の幸せをバランスよく保つことが重要で、アイセンターでそれが実現できることを願っている。

